

2019（令和元）年度 全国私立中学高等学校
私立学校特別研修会
英語教育改革特別部会
（西日本エリア）
実施報告

一般財団法人日本私学教育研究所 主催／日本私立中学高等学校連合会 後援

国においては、グローバル化への対応の一環として、新学習指導要領の実施に向け小・中・高等学校等を通じた抜本的な英語教育改革を推進しており、大学入試の英語についても4技能の総合的な評価が拡大するなど、私立学校においてもこれらへの対応は喫緊の課題です。そこで当研究所では、英語科教諭の指導力強化を図るための特別研修を実施いたします。

初日は灘中学高等学校（兵庫県神戸市）を会場に、英語の授業の視察、視察校の教諭を交えた意見交換、木村達哉・同校英語科主任による発表を行いました。

同校では、様々な学問や他国の文化を知るための英語力と、自分の考えを英語で表現できるコミュニケーション能力の習得を目指しています。基礎力の養成を大切にしながら、全学年でネイティブ教員が加わって4技能を総合的に育成しています。海外での異文化研修や「土曜講座」等、授業外の取り組みも盛んです。

翌日は神戸国際会館セミナーハウスにおいて、JENNIFER SELVIDGE氏による講演、文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」受講者によるワークショップ、英語教育推進リーダーによる実践発表・模擬授業を行いました。また、参加者の交流を深めてネットワークづくりを進める多彩なプログラムを実施しました。

- ◆ 会 期 ◆ 令和2年2月21日（金）～22日（土）
- ◆ 会 場 ◆ 灘中学高等学校 21日(JR 住吉駅) 神戸市東灘区魚崎北町 8-5-1
 神戸国際会館セミナーハウス 22日(JR 三ノ宮駅) 神戸市中央区御幸通 8-1-6
- ◆ 参加人員 ◆ 39名
- ◆ 参加対象 ◆ 都道府県私学協会加盟の私立中学校・高等学校・中等教育学校の英語科教員
- ◆ 日程概要 ◆

時刻	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	30				30	10		30	30
2月21日(金) 灘中学高等学校				受付	開 会 式	視察校 発表	研究授業		質疑応答・意見交換会
2月22日(土) 国際会館セミナーハウス	講演		ワークショ ップI	昼食	ワークショ ップII	実践発表 模擬授業	研究協議	閉 会 式	WSは 2グループ

◆ プログラム ◆	
○講 演	演 題 「Using the Global Scale of English in Lesson Planning」 講 師 JENNIFER SELVIDGE カンザス大学 Applied English Center 常勤講師 米国国務省 English Language Fellow
○視 察 校 発 表	テ ー マ 「本校の英語指導について」 発 表 者 木村 達哉 灘中学高等学校 英語科主任
○研 究 授 業	灘中学高等学校（授業視察・施設見学）
○質 疑 応 答 ・ 意 見 交 換 会	研究授業者との質疑応答、グループでの意見・情報交換
○実 践 発 表 模 擬 授 業	テ ー マ 「さまざまな生徒のための4技能を用いた授業」 発 表 者 石井玲子 大阪成蹊女子高等学校 教諭 テ ー マ 「生徒に4技能を使わせるための授業計画と実践」 発 表 者 森田剛志 滝川第二中学高等学校 教諭
○ワ ー ク シ ョ ッ プ	英語で授業のヒント Teaching English in English 平成30年度文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」受講者
○研 究 協 議	ワークショップ、模擬授業等についての意見交換

◆ 日程表 ◆

2月21日(金)

〔会場 灘中学高等学校 大講義室〕

12:00	受 付〔 大講義室 〕		
12:30	開会式	司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長	
	1. 主催者挨拶	一般財団法人日本私学教育研究所	理事長 吉田 晋
	2. 視察校代表挨拶	灘 中 学 高 等 学 校	校 長 和田 孫博
	3. 研修会運営方針	英 語 教 育 改 革 特 別 委 員 会	委 員 長 平方 邦行
12:50	4. 日程説明	灘 中 学 高 等 学 校	教 諭 中西 健介
12:50	◆視察校発表		
	司会 浜野 能男 特別委員		
	テーマ 「本校の英語指導について」		
13:10	報告者	灘中学高等学校 英語科主任	木村 達哉
13:10	◆研究授業 (授業は各教室で行います。)		
	5 限目 (13:10~14:00) ※研究授業は2班に分かれ、5限目はA班が中学生、B班が高校生、6限目はA班が高校生、B班が中学生の授業を視察。		
	学 年	研究授業者	教室名
	中学1年	川原 正敏	2階 中学1年2組
	中学3年	三窪 法正	4階 中学3年2組
	高校2年(1組)	マーク・エイズリー	3階 第2英語教室
	高校2年(1組)	ジェイソン・トムズ	3階 第1英語教室
14:00			
14:10	6限目(14:10~15:00)		
	学 年	研究授業者	教室名
	中学1年	川原 正敏	2階 中学1年4組
	中学3年	三窪 法正	4階 中学3年3組
	高校2年(2組)	マーク・エイズリー	3階 第2英語教室
15:00	高校2年(2組)	ジェイソン・トムズ	3階 第1英語教室
15:00	◆施設見学		
15:30	灘中学高等学校の充実した施設を見学します。		
15:30	◆質疑応答・意見交換会		
	研究授業を受けての質疑応答の後、グループに分かれて意見交換を行います。		
	司会 山崎 吉朗 一般財団法人日本私学教育研究所 特任研究員		
	1. 質 疑 応 答 (15:30~16:30)		
17:00	2. 意 見 交 換 会 (16:30~17:00) ファシリテーター 英語教育改革特別委員		
17:00	解 散		

9:30	◆講演 演題 「Using the Global Scale of English in Lesson Planning」 ※大学の専門家等による英語教育に関わる最新の情報及び新たな英語指導法等についての講演・ワークショップ 講師 カンザス大学 Applied English Center 常勤講師 米国国務省 English Language Fellow JENNIFER SELVIDGE	司会 田中 歩 特別委員 講師紹介 中川 千穂 特別委員
11:00		〔会場：701〕
11:00	◆ワークショップⅠ テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English」 「Vocabulary」「Writing」 指導 文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者 A：九州国際大学附属中学高等学校 教諭 藤下 美貴 B：鹿児島第一中学高等学校 教諭 ケラウェイ 宏子	司会 A：浜野 能男 特別委員/B：伊藤 佳貴 特別委員
12:00		〔会場 A：701/B：702〕
12:00	◆昼食	
13:00	※各ワークショップ会場にて、情報交換会・懇親を兼ねて昼食をお取り下さい。	
13:00	◆ワークショップⅡ テーマ 「英語で授業のヒント Teaching English in English」 「Vocabulary」「Writing」 指導 文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者 A：九州国際大学附属中学高等学校 教諭 藤下 美貴 B：鹿児島第一中学高等学校 教諭 ケラウェイ 宏子	司会 A：浜野 能男 特別委員/B：伊藤 佳貴 特別委員
14:00		〔会場 A：701/B：702〕
14:00	◆実践発表／模擬授業 テーマ 「さまざまな生徒のための4技能を用いた授業」 発表者 英語教育推進リーダー 大阪成蹊女子高等学校 教諭 石井 玲子 テーマ 「生徒に4技能を使わせるための授業計画と実践」 発表者 英語教育推進リーダー 滝川第二中学高等学校 教諭 森田 剛志	司会 伊藤 佳貴 特別委員
15:20		〔会場：701〕
15:20	◆研究協議 ※ワークショップおよび模擬授業に関して、ワークショップ指導者、英語教育推進リーダーおよび参加された先生方で、質疑応答を交えながら意見交換を行います。	司会 伊藤 佳貴 特別委員
16:15		〔会場：701〕
16:15	◆閉会式	司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・事務局長
16:30	1. 総括 一般財団法人日本私学教育研究所 特任研究員 山崎 吉朗	
16:30	解散	

視察校での写真撮影について

生徒個人が特定できる写真撮影は禁止とします。撮影した写真は学校内の研修や報告等に活用する場合に限り使用を許可しますが、学校のホームページや紀要・報告書等への掲載、参加者個人のSNSやインターネットのサイトへのアップロードは禁止とします。また撮影写真の使用後は速やかに破棄頂きますようお願いいたします。また、動画（ビデオ撮影等）についてはすべて禁止とします。

◆ 学校紹介 ◆

灘中学高等学校 (理事長 嘉納 健二/校長 和田 孫博)

昭和2年10月24日、灘五郷の酒造家両嘉納家及び山邑家の篤志を受けて旧制灘中学校として創立。

嘉納家の親戚で、当時東京高等師範学校(現筑波大学)校長兼講道館館長であった嘉納治五郎先生を顧問に迎え、校是に柔道の精神『精力善用』『自他共栄』を採り、翌3年に開校された。教育の基本を確立したのは、嘉納先生の愛弟子として初代校長に就いた眞田範衛先生で、『教育の方針』を定めるとともに、自ら校歌・生徒歌も作詞した。

戦後、中高六箇年一貫教育の灘中学校・高等学校として再出発し、全国的なレベルにあったスポーツに加えて、学業でも昭和40年代には全国屈指の進学校へと躍進を遂げた。1学年あたり200名程の学校だが、創立以来のリベラルな校風と学問への高い志の下に質の高い教育を目指している。開校から85年経った平成25年に、2棟の校舎の建替え、中学棟の耐震補強リニューアル、新図書館の新築、2つのグラウンドの人工芝化、柔剣道場やトレーニングルームの更新など、大規模な工事も竣工し、新しい時代に適応した教育環境を整えている。

◆ 講師プロフィール ◆

JENNIFER SELVIDGE

14歳まで両親と香港に在住。現地のインターナショナルスクールに通う。米国に帰国後マサチューセッツ州 Eastern Nazarene College で英語教授法を専攻し学士号取得。カンザス州カンザス大学で教育修士号取得後、カンザス州、ミズーリ州、ドイツの大学等で ELS の教師として勤務。現在はカンザス州カンザス大学 Applied English Center で常勤講師の職にあるが、2019年9月～2020年7月までは、米国国務省から English Language Fellow として派遣され、東京都教育庁で英語教育のサポート活動を行っている。

◆ 講師・発表者・指導員(順不同) ◆

JENNIFER SELVIDGE カンザス大学 Applied English Center 常勤講師
米国国務省 English Language Fellow

和田 孫博	灘中学高等学校 校長
吉田 晋	富士見丘中学高等学校 理事長・校長
中川 武夫	蒲田女子高等学校 顧問
木村 達哉	灘中学高等学校 英語科主任
藤下 美貴	九州国際大学附属中学高等学校 教諭
ケラウェイ宏子	鹿児島第一中学高等学校 教諭
石井 玲子	大阪成蹊女子高等学校 教諭
森田 剛志	滝川第二中学高等学校 教諭
中川 千穂	工学院大学附属中学高等学校 教諭

◆ 特別委員・指導員(順不同) ◆

平方 邦行	工学院大学附属中学高等学校 校長
浜野 能男	普連土学園中学高等学校 教頭
中西 健介	灘中学高等学校 教諭
田中 歩	工学院大学附属中学高等学校 教諭
伊藤 佳貴	大同大学大同高等学校 教諭
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長
山崎 吉朗	一般財団法人日本私学教育研究所 特任研究員

実施概要

令和2年2月21日・22日、灘中学高等学校および神戸国際会館セミナーハウスを会場に開催し、全国の英語教員39名が参加した。

初日は灘中学高等学校にて開会式を行った後、研究授業を視察。続いて木村達哉・同校英語科主任による視察校発表、研究授業を行った先生方との質疑応答の後、全体で意見・情報交換を行った。

2日目は神戸国際会館セミナーハウスに会場を移し、Jennifer Selvidge・カンザス大学 Applied English Center 常勤講師/米国内務省 English Language Fellow による講演と、文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」(Leaders of English Education Program、※以下 LEEP)平成30年度受講者の先生方の指導による英語でのワークショップ、実践発表・模擬授業、意見交換会が行われた。

【2月21日(金)】

開会式

①主催者挨拶(吉田晋・理事長)

時代が変わっていくように、英語教育も変わらなければいけない。文部科学省は LEEP 等を実施してきた。11月1日の英語4技能の延期で終わったように思われているが、そうではない。灘中学高等学校では多くの生徒が国立大学に入学しているが、英語教育は決して単なる記憶型・暗記型の教育ではない。英語4技能をしっかりと身につけている。その様子を是非見て頂きたい。



今回、英語4技能試験や記述式試験は延期になったが、子どもたちに申し訳ないという言葉がない。今の高校2年生どころか高校3年生、そして指導してきた先生方にも、お詫びしなければならない。ネイティブを巻き込み、4技能型の授業に変えるのは簡単なことではないからだ。今年の入試状況を見ると、英語4技能をきちんとやっていた生徒達を評価している大学もある。それが2024年までに膨らみ、大学入試自体が変われば良いと思う。来年は英語センター試験も点数が変わり、大学も多様な入試を始める。高校の教育が変わるために大学が変わる必要がある。

今回の研修会に参加して頂いている英語科の先生方は、改革の中心である。大変だが、英語科の先生方が頑張れば、周りの先生方も頑張る。是非そのような思いで21世紀の子どもたちのために時間を費やし、英語科の先生方が中心になって変えて頂きたい。

②主催者挨拶(中川武夫・所長)

当研究所は全国各地で様々な研修会を実施しているが、基本的には教科研修会を実施していない。全国各地の学校の教科指導のレベルは千差万別で、どのレベルに照準を合わせても参加者全員に満足頂くことが難しいため、教科研修会は各県や各地域にお願いしている。

しかし英語教育改革特別部会だけは別である。英語教育の指導法が大きく変わるため、文部科学省で LEEP が行われるようになり、これに呼応して特別研修会を実施した。LEEP は平成30年度で終わったが、当研究所としては来年度以降、当研修会をどのように発展させるか検討中である。先生方にも是非、忌憚のない意見をアンケート等でお寄せ頂きたい。



③視察校代表挨拶（和田孫博・灘中学高等学校校長）

本校の視察が期待に添える内容になるか心配だが、研究授業は、できるだけ普段のありのままの授業を行うように伝えている。

本校は昭和2年創立、3年に開校された。嘉納治五郎先生が創立時の顧問である。母体は酒屋で、白鶴、菊正宗、桜正宗の3社が母体である。嘉納治五郎先生は菊正宗の分家筋だが、この地に学校を作りたいとあって顧問をお願いし引き受けて頂いた。

戦後の駐日米大使であり、親日派で有名なライシャワーによる「なぜ英語を勉強しなければいけないか」という文章がある。高校2年生の生徒に良く読ませるのだが、ライシャワーは「Logical Thinking を鍛えるためだ」と書いている。本当の英語教育は日本人でありながら外国の人と意思疎通ができるようにすることで、そのために日本語の論理能力、そして、英語の論理というものを理解していかなければいけないということではないかと思う。



④研修会運営方針（平方邦行・英語教育改革特別委員長）

学習指導要領の変更において、特に英語4技能に関しては進展が見られないが、グローバル化は進み、完全に変容するグローバル社会となった。公立の教員中心のプログラムである LEEP に、1年遅れで私学も参加させて欲しいと交渉し受講できるようになり、その実習の受け皿として当研修会を実施してきた経緯がある。LEEP は5年経過したが、その中でどのくらいリーダーになった人が自校や地域で研修を行うことができているのだろうか。



同時に、大学入試（大学入学共通テスト）で英語4技能が扱われるのは今の高校2年生であったが、紆余曲折があり延期となった。その時の先生方の思いがどうだったかは分からないが、少なくとも日本私立中学高等学校連合会は最初から反対や賛成をしていたわけではない。その真意に関してはきちんと受け止め、様々な会議に出席し、英語4技能を取り入れることには意味があるが、このようなやり方では成功しないと意見を言ってきた。その意見に関わらず決定したことが積み上げられていったが、一旦決まったことを間際に全否定するのは大人気ない。ここまで来たら実施する方向で整備し、より良い試験にしてもらいたいと言ってきた。しかし今回は延期となってしまった。日本の英語教育は10年、あるいはそれ以上遅れることになるかも知れない。

私立大学入試の状況を見ると、大学入学共通テストでの英語4技能は延期されたが、大学によっては英語4技能を測る入試は増えている。2技能に戻ったと話を終わりにするととんでもないことになる。犠牲になるのは子どもたちだ。そのため、英語4技能は当研修会でもしっかりと扱っていかうと考えている。次年度以降はレベルを上げての実施を考えており、内容を検討しているところだ。

今回の研修会は1日半だが相当中身の濃い研修になっている。是非、皆さんで盛り上げて最後まで進んで頂きたい。

視察校発表【木村達哉氏】

木村達哉・灘中学高等学校英語科主任が「本校の英語指導について」をテーマに視察校発表を行った。英語教育のカリキュラムや指導方法などについて発表した。

本校にはネイティブが3名勤務している。2名は教諭で日本人教諭と同様に担任や部活動顧問を持ち、保護者対応・保護者面談も行う。日本人教員との棲み分けはあまり意識していない。日本人教員は中学1年生から担当を6年間持ち上がるシステムとなっているが、読む、書く、聞く、の3技能が中心となる。ネイティブの先生方は「日本人の先生方がきちんと文法や語彙を押さえてくれる。それをベースにして話す活動に取り組める」と言っている。



また統一した教材等はなく、お互いに干渉もしない。6年後に生徒達がこの学校に来て良かったと言ってくれるように、卒業後の進路保障ができるように、という Unwritten Rules はある。単に受験英語に特化しすぎないようにバランス良くやっているというのが現状だと思う。各学年には英語科は1人しかおらず、6年間を1人で旅行しているような感覚だ。本校で働き始める時には、凄い生徒が沢山いるのだろうと思っていたが、小学校の時からしっかり勉強している子どもが多く、逆に中学校入学時に勉強疲れを起こしている生徒もいる。そのため勉強のモチベーションを上げる意味で、中学1年生は語彙・文法をしっかりと教える。例えば、身の回りのことは全部英語で言えるようにする、といった取り組みをしている先生が多い。シラバスは先生方それぞれであるが、行き当たりばったりで6年間の旅行を始めるのではなく、目的地を定め、どこの港にどのように寄るのか、それぞれの教員が責任感を持って進めていく。途中で差し替えることもあるが、中学1年生を受け持つ時にそれぞれの英語科教員が大体のイメージを持っていると思う。

私の学年は高校2年生で、大学入学共通テストの対象となる。そもそも、英語も日本語も数学も全てツールだ。例えば、日本史の分野に進む、物理の分野に進む、医学の分野に進むという時に、それをしっかりと英語もしくは日本語で話せるということが最終的にはゴールである。たった6年間で全ては話せないにしても、その入口くらいまで持っていきたいという意識は必要だろう。

いわゆる4技能型の民間試験にしても英会話的なものが中心になっているが、英会話よりも生徒達が自分の人生の中でどのような英語を使おうとするのが大切だ。例えば医師になる人が日本の歴史について英語で話せてもあまり意味が無い。自分の人生を深く考え、その中で英語をどのようにして使うのかを6年かけて考えさせることが一番大切なのではないか。そして生徒達のモチベーションを支えているのはその部分ではないかと考えている。

研究授業

研究授業は、5・6時間目に中学1年、3年、高校2年の計8クラスで英語の授業を視察した。その後はグループに分かれ、灘中学高等学校関係者の案内で施設を見学した。参加者からは、レベルの高さに驚いた、4技能を意識した授業が参考になった、自校でも取り入れたい等、熱い反響が寄せられた。



質疑応答・意見交換会

5・6 限目の研究授業と実践発表について、授業を担当された灘中学高等学校の先生方を招き、質疑応答を行った。その後、参加者はグループ毎に意見・情報交換を行った。



【2月22日（土）】

講演

Jennifer Selvidg・カンザス大学常勤講師／米国国務省 English Language Fellow が「Using the Global Scale of English in Lesson Planning」を演題に講演を行った。講演の一部はワークショップ形式で行われ、参加者は講師の指示の下グループで活動した。

英語教師が指導計画を立てる際には、学習者の習熟度に見合った明確な学習目標を設定し、その目標に対応する学習活動を作成することが大切である。授業設計における基礎・基本として以下の3点がある。

1. 学習者の習熟度はどれくらいあるか。
2. 学習者は次に何を学ぶ必要があるか。
3. その目標に到達するにはどのような学習活動が必要か。



教師はこれらの状況を正しく把握し指導を通して次のステップへと導いていくことが求められる。そこで有効なのが学習者の英語力を測るための客観的指標の存在だ。一例として、ピアソンによって開発された英語習熟度指標「Global Scale of English（以下 GSE）」を紹介する。

英語の国際的指標と言えば、ヨーロッパ言語共通参照枠(以下 CEFR)が挙げられる。CEFR は、初級の A1 から上級の C2 まで6つのバンドに分かれているが、それぞれのバンドにおける学習量や学習時間は均等ではない。具体的には、A2 から B2 までの3バンドの幅が最も広く、最も多くの時間が費やされている。

一方、ピアソンが開発した GSE は、「英語で何ができるか」という観点から、レベルを 10 から 90 まで細分化している。もちろん、CEFR に完全準拠した形で作られているため、各種教材や検定試験との相関も見ることができる。またそれぞれのレベルにおいて4技能別に具体的な CAN-DO リストと紐づけられているので、授業に大変取り入れやすいことが魅力である。以下は、ライティングの GSE における CAN-DO の一例である。

GSE 43-50/B1: Writing

43 **AC** 著作物をまとめるために簡単な見出しをつけることができる。(P)

自分の文化（食べ物、祝日、祭りなど）に関する主要な情報を提供した簡単なテキストを書くことができる。(P)

44 手本を示されれば、経験、感情、反応などに関する基礎的な描写を書くことができる。(P)

簡単な物語文または説明の終わりを明確に指摘することができる。(P)

手本を示されれば、日記やオンライン投稿で個人的な経験について書くことができる。(P)

さて、GSE の CAN-DO リストを活用したグループ活動を行う。実際の生徒を思い浮かべながら、生徒たちが英語で「できること」または「これからできるようになってほしいこと」を英語で意見交換してもらいたい。各学校の教科会議においてこうした議論が活発に行われることを期待する。

GSE の具体的な活用方法について、ライティングの学習活動を例として紹介する。例えば以下の GSE-45 を大きな目標 (Goal) として掲げたとしてしよう。

45 **AC** 手本を与えられれば、トピックセンテンスと関連詳細情報を含む基礎的なパラグラフを書ける。(P)

この大きな目標に到達するための過程として、GSE には、以下のような中間の目標 (Objectives) がレベル別に存在する。教師は、学習者の現状のライティング力を測定した後、レベルに適した指導計画を作るのだが、GSE を活用することで、学習者を着実に GSE-45 まで導くことを可能としている。

27 個人的な興味について簡単な文を書くことができる。(P)

29 なじみのある物について簡単な文を書くことができる。(P)

30 自分の仕事や、自分以外の人の仕事について、簡単な文を書くことができる。(CA)

34 基礎的な定型表現を使用して、自分の好きなことや嫌いなことに関する短いテキストを書くことができる。(P)

41 日常的事物 (人、場所、仕事、勉強など) について、つながりのある文を書くことができる。(CA)

ここで留意すべきは GSE を活用した時における教師の「授業デザイン力」だ。例えば与えた課題が学習者にとって難しすぎる場合は、無理せずに指導プランを見直すことが大切だ。ヴィゴツキーの最近接発達領域 (Zone of Proximal Development) を参照したい。また、授業デザインにおいては、「状況(context)」「妥当性(relevance)」「内容(content)」「指導時間(instruction time)」「指導方法(instructional method)」などを考慮する必要もある。GSE の CAN-DO はインターネットで検索できる。



ワークショップ

参加者は A・B グループに分かれ、LEEP 受講者による指導のもとワークショップを行った。

今回は「Vocabulary」「Writing」を実施した。参加者が生徒役となって授業を体験することで、英語で授業を行うための具体的な手順をはじめ、指導上の留意点や教材の作り方など、明日の授業に役立つ内容を共有することのできる良い機会となった。どちらの会場においても、参加者による積極的な議論や質疑応答が交わされ、時間が足りないほどの盛況ぶりであった。

○A グループ：藤下美貴・九州国際大学附属中学高等学校教諭

<ワークショップ I 「語彙・表現」に係る言語活動(1 時間)>

1 時間目のワークショップでは受験指導に用いられる標準的な単語帳から 8 つの形容詞を抜粋し、以下の 5 つの活動事例を紹介した。

1. Trying to remember — 思い出してみる
2. Classifying — プラス・マイナス・ニュートラルに分類する
3. Visualizing — 絵や図で表現する視覚化
4. Mind maps — 情報のつながりを図で表す
5. Example sentences — 自己に関連した例文を作る



語彙を広げることは英語学習における最大の課題と言える。今回紹介した 5 つの活動は、各学校の生徒の状況に応じて取り入れてもらうことができる。また生徒たちの意見を聞きながら組み合わせる使う

ことも有効だ。どの学校でも、帯活動として単語帳のリストから発音確認・小テストなどを毎日繰り返しているだろう。その中で適宜このような活動を入れることは、学習者の意欲を高めることにつながる。

<ワークショップII「書くこと」に係る言語活動(1時間)>

語彙や文法事項の正確さを追求するライティングではなく、動的なコミュニケーションの一環としてのライティングがテーマだ。具体的には、自分自身の考えや意見を述べたり、自身の経験に基づいたりした「書くこと」の活動を行う。また、書いたものを素材として「話す」活動につなげ、学習者の意欲を高めることにも取り組む。コンピテンシーを土台とした「書くこと」の活動に取り組む際に、注意すべき点として以下の3点が挙げられる。

1. 書く理由や相手をきちんと設定する。
2. 明確かつ系統だった指示を与える。
3. 生徒の活動や反応に対し、前向きなフィードバックを与える。

実際には、コミュニケーションの一環として「書くこと」を授業の中に取り入れるには、教員のしっかりした準備が必要だ。ワークショップ後の意見交換会の中でも、先生方から様々な意見があった。特に多かったものは、「到達度の異なる生徒たちが同じ活動に取り組む難しさ」と、「正解を聞いて再現する授業からの転換の難しさ」だ。しかし、学習指導要領の改訂に伴い、その方向性をふまえた指導に移行する必要性、つまり生徒たちが社会を多面的・多角的・批判的にとらえる力を育まなければならないという認識は、先生方に共通していた。さらに、「今回のような研修を通じて自身のスキルを向上させていきたい」、「この感覚を同僚と共有し授業を変えていこうと思う」といった声もあった。このような気持ちを共有することが、現場教育の在り方を次の段階に進めていく力になる。短い時間ではあったが、熱のある充実したワークショップと意見交換会となった。

○B グループ：鹿児島第一中学高等学校教諭・ケラウェイ宏子

<ワークショップI・Vocabulary>

1時間目は「Vocabulary」のセッションを行った。ボキャブラリーを生徒が覚える際、単語リストなどの単語集を使用して覚えることは確かに効果があり、参加者の授業でも多く使われていた。しかし、このセッションでは、記憶に残る、或いは使い方も同時に学べるやり方にフォーカスし、5つのアクティビティを体験した。短時間で印象づける活動ができるということで、参加者からは授業に取り入れたいという意見が多く聞かれた。



<ワークショップII・Writing>

2時間目は「Writing」のセッションを行った。レストランの口コミを英語で書くという設定である。清書までを7つの段階に分け、スモールステップで、どの生徒も無理なく清書まで仕上げられる。プロセスの中でそれぞれの段階での目標を明確にし、一つ一つクリアしていく指導法は多くの参加者に支持を得たようだった。特に学力差がある集団には、ペアワークを随所に取り入れていくことで、どの生徒も到達できるという点が好評を博した。



実践発表／模擬授業

2名の英語教育推進リーダーが、LEEP ワークショップの内容をいかに授業で実践しているのか、実践発表／模擬授業を行った。終了後は参加者から多くの質問が寄せられた。

○「様々な生徒のための4技能を用いた授業」

石井玲子・大阪成蹊女子高等学校教諭

(Lesson Presentation)

Today I'm going to give you some advice by introducing one of my classes including 4 English skills. I'd like you to be students, but don't try to be too brilliant ones. Just relax. This is the 2nd class of one lesson. The students have finished part 1, 2, 7 already.



Why can't we remember things as we want to even if we try hard? This article is titled "Wonders of memory" Let's do some vocabulary review. What is the key part of brain to remember things? - Hippocampus. The hippocampus is the part of brain all of us have. What are the five factors that affect the encoding of knowledge? What influences the retention of information? We have already learned the first factor. Today, we are going to find out 4 other factors. Plus, let's think what the better ways to remember things are. First, discuss this in pairs. How do you usually prepare for the vocabulary test? Imagine you are one of your students who get 4 or 5 points out of ten on every vocabulary test.

(pair discussion)

Now, make group according to the ID I have given to you. Each member of the group read different paragraph from 3 to 6. This is individual reading and do the task 1 in two minutes.

The hippocampus becomes _____ when you _____.

(2 minutes)

Now, work on task 1. When you finish, move to the groups 3,4,5,6. These are the groups for each paragraph from 3 to 6. Every member of the group has read the same paragraph. Now, you are going to check answers for task 1. Then move to task 2. You have 8 minutes. After this activity, you are going to share your answer with those who haven't read your paragraph. Be prepared.

(8 minutes)

Now, make new groups according to A to D. Move your desks. Share your task 2 answer with the others who haven't read your paragraph. Each one has one minutes. Start from 3, then continue to 4, 5 and 6. Listeners may fill in the blanks on worksheet. You have five minutes for this activity. Ask questions if you need.

(5 minutes)

Finally, I give you the assignment for tomorrow's lesson.

'Make your plan to get ready for the next class.'

(解説)

先生には釈迦に説法かとも思うが、実践報告をさせていただいた。実際の授業は今の形に近い物をちりばめてやっている。全文は難しくても自分に割り当てられたパラグラフ 1つ分程度なら生徒はどうかできる。昨日の灘高校で自分の生徒との違いに驚いたが、研修で違う学校を知る機会は大変貴重である。自校は 1400 人程度の大人数の学校で、14~16 学級ある。最大時は 1600 人ほどいた。授業を行う環境作り、生徒との関係性作りが大切と思っている。生徒 1 人ひとりの負担を減らし、peer pressure を少なくするため今日の授業のような工夫をしている。

教員の使う英語は完璧でなくて良いと思う。生徒に能動的言語活動をさせるという気持ちを忘れずにいることが大切であろう。教員が英語の発話をすることで生徒が話す雰囲気を作ること。また生徒が英語を話したらどんなに短いものでも必ずコメントし、褒めることが大切だろう。'No Japanese' と言うだけでは生徒は英語を話すようにはならない。英語を使う理由、目的を生徒が感じ、納得していることが大切ではないか。簡単ではないが、諦めずに努力を続けていきたい。生徒が個人でやってきた調べ学習等の課題はペアの活動からグループでの発表へつなげるなどステップが必要。グループなら役割分担でき、英語は苦手でも発表は得意、といったように力を発揮できる瞬間を作ることできる。

教材については 例えばアメリカで活躍した女性を25名ほど取り上げた児童書を3年間継続的に使う試みも。全てを理解していなくても、その人物に対する興味から英語を学ぶ姿勢が培われていく姿を見た。その人物が関わったこと(公民権活動、スポーツ、フェミニズム運動等)に学びを発展させたり、その人物をよく表す形容詞を文中から選んでシェアしたりと一冊の本から様々な活動ができた。生徒が、英語学習を通じて生き方を考えたり、世界に興味を持つような授業ができるよう、今後も努力を続けたい。

○「生徒に4技能を使わせるための授業計画と実践」

森田剛志・滝川第二中学高等学校教諭

(Lesson Demonstration)

Let's begin the lesson. First, let's learn vocabulary.

(Vocabulary のシートを使って英語→日本語の意味 日本語→英語の練習。)

Today, you are going to learn 'which'.

Listening activity

Listen to short stories.

- (1) This is a story about Ken. Ken is an active boy. He likes sports. He usually plays soccer but doesn't play baseball. Which is Ken? (A と B 二人の男の子の絵を見せて正しい方を選ばせる。)
- (2) Ken has a dog. It's white. Ken can hold it in his hand. Which is Ken's dog? (A と B 二匹の犬の絵を見せて正しい方を選ばせる。)
- (3) Ken lives in a pretty house. It has a yellow wall and triangle roof. Its door is blown. Which is Ken's house? (A と B 二軒の家の絵を見せて正しい方を選ばせる。)

Reading activity

I'm going to give you a worksheet. Read the stories below and answer the questions. You have ten seconds for each questions.

- (1) (文) Tom is a nice young man. He is very cool. He likes blue shirts. His eyes are good, so he doesn't wear glasses.
(質問) Which is Tom? (A と B 二人の男性の絵を見せて正しい方を選ばせる。)
- (2) (文) Tom has a horse. It is white. It has a baby. The baby is brown. The baby always runs with its mother.
(質問) Which is Tom's house? (A と B 二頭の馬の絵を見せて正しい方を選ばせる。)
- (3) (文) Kumi has a pet. It's a bird. It's blue. It's always happy. It sings very well.
(質問) Which is Kumi's bird? (A と B 二羽の鳥の絵を見せて正しい方を選ばせる。)

Speaking activity

Now, answer some questions. For example, 'Which do you like, dogs or cats?'

You can answer, 'I like dogs / cats. "I like both." I don't like either.'

(Ask these questions to some students.)



- ・ Which do you like, donuts or cakes (bananas or melons / bread or rice) ?
- ・ Which color do you like, blue or red?
- ・ Which subject do you like, math or English?

Now, make two questions on your worksheet, and ask your classmates. Try not to look at the worksheet. Stand up and walk around. Ask two of your classmates.

(Students mutually ask their questions.)

(生徒が着席した後) Now, ask me your questions.

(Students ask their questions to the teacher.)

(e.g.) Which do you like, Tokyo or Osaka? (soccer or baseball / Kirin or Sapporo / sake or shochu)

Writing activity.

Now, write your opinion on your worksheet.

The question is 'Which season do you like?'

Write about four or five sentences. You have five minutes.

I'll show you my example.

(Model sentences) I like winter. I like skiing. I go skiing with my family every year. It's very fun.

(5 分後)

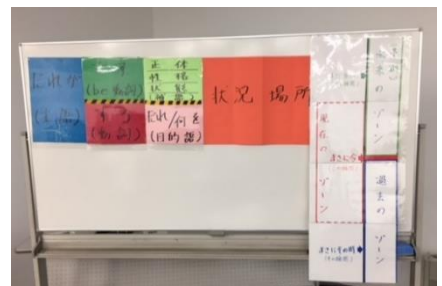
When you finish writing, try to memorize the sentences. Then, once again, tell your opinion to two of your classmates. You can hold your worksheet but try not to look at it. When you finish this activity, you can go back to your sheet.

(生徒が着席した後、何人かに発表させる)

(授業の最後に) Today, you practiced very well. Good job, everyone.

(解説)

5年前に LEEP を終えたが、4 技能を使わせるためにどうしたらいいのか、常に悩みながら授業をしている。生徒が英語を身につけるには context が大切と教わったので、今回の which の授業でも「which = どちらが」だと最初に教えず、意味を類推させてから活用させるために Listening, reading, speaking, writing の順にし、色々とパターンを変えている。最後の作文の質問では which は 2 つ以上のものでも使えると示した。普段の授業でも話させたり書かせたり読ませたり聞かせたりと教科書以外の教材も使い、ワークシートも自作するなどして工夫しているが、限られた時間数で授業を組み立てて行かねばならないし、knowledge も身につけさせないといけないので、いわゆるスタンダードな単語や例文の暗記の練習もしている。Speaking の activity では生徒に自由に活動させると日本語を使ったり、関係のない話をしがちなので、列ごとに、1 列は固定、もう 1 つの列がベルトコンベヤーのように移動するような工夫もしている。例えば 6 列ならば 2、4、6 列のみが移動する。練習した後には見ないで覚えさせるようにしている。正確に学ばせるのも大切だと考えているので、生徒の作文は回収して添削している。教師も慣れてくると、次第に早く添削できるようになってくる。また中学生にありがちな be 動詞と一般動詞の混同をしないように表を毎時間貼り、be 動詞と一般動詞の間は通行禁止の線を引いている。時制についても正確に使えるよう、同じように表を貼って授業を進めている。



研究協議 I

ワークショップと実践発表／模擬授業を受け、LEEP の先生方を招き質疑応答を行った。その後、参加者によるグループでの意見・情報交換が行われた。



閉会式

総括（山崎吉朗・特任研究員）

当部会は、今回のような形での研修は最後になる。LEEP の実習を行う場としても開催してきたが、LEEP が終了した為、今後は内容を刷新して開催することを計画している。

本来、当研究所では教科の研修は行っていないため、この英語の研修会は特別研修会という形で行っている。発端は、高校の学習指導要領で「英語による英語の授業」が指示された事である。私学では急な話となり慌てたが、公立は事情が違った。文部科学省が着々と公立の教員に対して「英語による英語の授業」を含めた内容の悉皆研修を行っていたのである。英語教育を売りにする私学は多くあったが、「英語による英語の授業」に関しては進んでいない学校も多かった。そこで、説明会「英語教育改革緊急説明会（平成 26 年 12 月）」等を開催し、英語教育改革の動向や最新情報を提供し、文部科学省が実施する LEEP についての説明も行った。

LEEP はカスケード研修という形を取っている、すべての教員に研修を行う事はできないため、リーダーを養成する研修を中央で行う。そして養成されたリーダーが各地区に戻り、それぞれの地域の中で教員を集め、学んだ授業方法を伝える。その研修を受けた教員がさらに幅広く伝えて行くことで、結果的に中央での研修がすべて教員に伝わるという構造である。しかし、これはあくまで“公立”である。調べたところ、私学はその研修に参加していなかった。参加していないというより、参加できなかったのである。それが 1 年目である。

研究所所長の希望としては、当研究所の英語教育研修に対して助成をしてもらい、つまり文科省の代わりに当研究所が研修を実施するということがあったがそれは法律上できないというのが文科省の回答であった。その後の交渉の中で、LEEP の中に私学という枠を設けるという提案が出た。私学だけ集め、公立とは別日程で同じ内容の実習を実施するというものであった。この提案は内容的には問題ないが、最後の大きなネックがカスケード研修の場であった。当然だが、それは教育委員会主催の研修会になるが、教育委員会の研修に私学教員が講師として立つことはできない。つまり、この研修の最大の目的である、地域に戻って裾野を広げて行く実習ができないのである。ここで頓挫すると研究所では諦めかけたのだが、文科省がさらに新たな提案をしてきた。私学の場合は特別に、都道府県や地区での私学での研修、当研究所研修の場でワークショップを行うことで実習ができるという提案である。当時の文科省外国語教育室長のおかげである。そして、ようやく 2 年目から私学も LEEP に参加することができるようになった。私学の参加人数や文科省の予算の問題もあり、その後、別日程での私学だけの実施ではなく、公立の教員と一緒に受講とはなったが、成果を伝える実習の場については、最後まで特例は継続し、無事に 5 年目を終えた。詳しい経緯は、LEEP を最初に受けた先生方に執筆頂いた当研究所の調査資料 No.252「平成 27 年度英語教育推進リーダー中央研修会報告」をお読み頂きたい。

前回からプログラムに実践発表を加えた。具体的な、実際に学校で実践している授業を発表し、模擬授業を行って頂いた。非常に意味があると考えている。ワークショップでは、参加している先生方が生徒役のために授業はスムーズに進むが、実際にそれぞれの先生方の学校ではそうはいかないのではない

かと心配する先生方も多いだろう。そこで、実際に学校で行っている授業を紹介して頂く、模擬授業を
実践して頂いた。実際に学校で実施している授業なので、参加の先生方もたいへん参考になったのでは
ないと思う。是非、皆さんに活用してもらえるとありがたい。

◆都道府県別参加者人数◆

都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数
北海道	0	千葉	1	滋賀	0	香川	0
青森	0	神奈川	3	京都	0	愛媛	0
岩手	0	東京	6	大阪	4	高知	2
宮城	1	富山	0	兵庫	1	福岡	5
秋田	0	石川	1	奈良	0	佐賀	0
山形	0	福井	0	和歌山	0	長崎	1
福島	0	山梨	0	鳥取	0	熊本	0
新潟	0	長野	0	島根	0	大分	0
茨城	2	岐阜	1	岡山	2	宮崎	0
栃木	0	静岡	0	広島	4	鹿児島	1
群馬	0	愛知	3	山口	0	沖縄	1
埼玉	0	三重	0	徳島	0	16都府県	39人

◆アンケート結果 回収率 87% (34/39名) ◆

○問1 当研修会への参加目的をお知らせ下さい。

- ・授業視察のため
- ・他校の情報収集と指導力向上のため

○問2 当研修会をどのように知りましたか。

- ・校長、管理職の勧めで ……17名(約45%)
- ・研究所からの送付物 ……12名(約32%)
- ・同僚の先生から ……7名(約20%)
- ・研究所ホームページ ……1名(約3%)

○問3 当研修会の各プログラム・内容等について、参考になった点、感想、意見等をお書き下さい。

研究授業

- ・レベルの高さ、進度の速さに驚いた
- ・4技能を意識した授業で参考になった

視察校発表

- ・明確な目標に即した指導を行っているのが印象的だった
- ・指導方針が良く分かった

質疑応答・意見交換会

- ・他校の実情が分かった。自校で共有したい
- ・他校の先生方と繋がりが持てた

講演

- ・カリキュラムやルーブリック策定の参考になった
- ・授業ですぐ使える内容も多く有益だった

ワークショップ

- ・英語でどのように授業をするかヒントになった
- ・バリエーションを増やす機会となった

実践発表／模擬授業

- ・オールイングリッシュの持っていく方が参考になった
- ・LEEPの学びが取り入れられていた

研究協議Ⅰ

- ・様々な私学の様子が分かり有意義だった
- ・今回の学びを学校でどのように活かすか話し合えた

○問4 今回のプログラムで今後、学校で活用したい内容がありましたらお書き下さい。

- ・GSEを用いて来年度の授業計画を進めたい
- ・ワークショップでのアクティビティ
- ・灘中学高等学校での視察内容

○問5 今後の本研修会への要望等をお書き下さい。併せて、当研究所の研修事業等に対するご意見がありましたらお書き下さい。

- ・先進校視察をまた実施してほしい
- ・現場の教員が参加できる研修の継続を希望する